# アクティブラーニング授業の紹介

子ども学科教員　前田有秀

## 理論を実践して学ぶ

子ども学科の前田です。主に保育者養成に関わる授業を担当しています。私は仙台市内の認可保育園で長年保育士として勤務してきた経験をもとに、子どもの成長・発達を促すための保育者の役割について、保育者を目指す学生の理解が深まるよう授業を工夫しております。その中の一つである『保育内容総合演習』という授業では、アクティブラーニング形式を積極的に取り入れています。なぜなら、保育者は子どもに“遊び”という活動を通して教育・保育を行うからです。保育そのものの理解に加えて、保育方法（保育的行為）を学生が体験すること、つまり「理論を実践して理解すること」が現場レベルの保育者養成につながると考えております。

では、保育内容総合演習の授業を紹介しましょう。

**〈授業の到達目標〉**
**・乳幼児期の保育が養護と教育（5 領域）が一体となって展開されていくことが理解できる。**
**・子ども一人ひとりの発達過程を踏まえながら、子どもの最善の利益を第一に考え、子どもの発達を助長するための具体的な保育的行為を実践できるようになる。**

私が特に重視しているのが、２つ目の目標の「具体的な保育的行為を実践できるようになる」です。この目標を達成するため、理論的な授業を積み上げ、演習授業で体験して保育への理解を深めるように組み立てています。

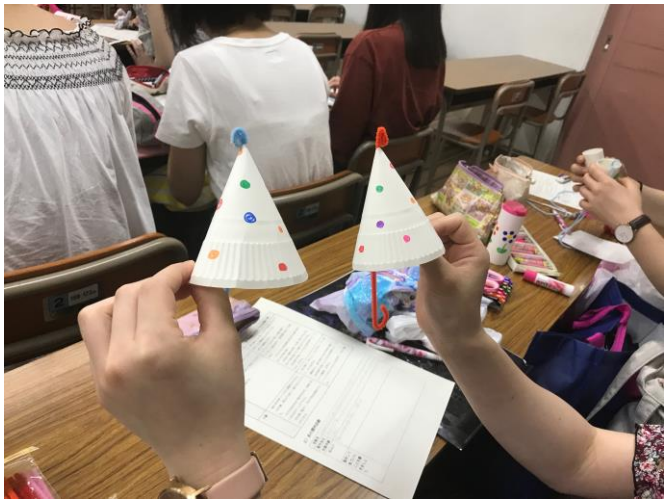
| 理論的な授業 | 演習授業 |
|---|---|
| ①幼児期の教育・保育の基本と保育内容<br>②保育の１日の流れと保育内容 | |
| | ③保育演習技術の意義と保育演習教材 |
| ④子どもの育ちと保育内容<br>⑤保育内容の展開<br>⑥乳児と保育内容<br>⑦２歳児の保育内容<br>⑧３歳児の保育内容<br>⑨４歳児の保育内容<br>⑩５歳児の保育内容 | |
| | ⑪身体を使った遊び・触れ合い遊び<br>⑫製作遊び |
| ⑬保育指導案の作成 | |
| | ⑭模擬保育演習 |
| ⑮模擬保育の振り返りと日誌の記録の方法 | |

以上のように、前半は主に保育そのものの理解や子どもの育ちについて学びます。理論的な授業の中でも、事例検討やグループワーク、ビデオ学習などを取り入れ、頭の中で保育現場をイメージし、理解しやすい授業を心がけています（頭の中もアクティブに）。

そして、後半はその学びを踏まえ、子どもの育ちを育むための保育的行為について、保

育者視点で、あるいは子ども視点で体験して学びます。そのひとコマを画像で紹介しましょう。

⑪身体を使った遊び・触れ合い遊びのひとコマで、音楽リズム遊びの「おふね」を体験しているシーンです。二人一組になり、♪おふねはぎっちらこ～とピアノのリズムに合わせて一緒に歌います。子どもにとっては運動機能の向上だけでなく、歌ったり踊ったり表現遊びを楽しみながら、人との心地よい関わりを育む活動であり、保育現場で広く取り入れられています。笑い声があふれるひと時でした。



⑫製作遊びの回のひとコマです。この学生は、紙皿をかさに見立てた作品を考えたようです。このように、子どもの年齢を学生が自由に想定して製作遊びを考え、事前に準備して授業に臨みます。特に、乳児から 5 歳児までの保育内容の理解を踏まえ、何歳児にはどの程度教材を準備して臨むかも大きなポイントです。例えば、この製作を 5 歳児で行うならハサミで紙皿を切るところから行うでしょうし、3 歳児であればあらかじめ紙皿が切り取られていて、保育者と一緒に円錐型に丸めてテープで止めることが考えられます。各年齢の発達段階を理解することで、子どもの発達に応じた保育活動を考えていきます。これは実際体験しないと、保育の工夫は見えてきません。現場では当たり前に行われていることです。細かいことですが、子どもが 20 人いれば、人数分用意しなければなりませんし、子どもは失敗をしたり作り直したくなるので、多めに準備しなければならないことも実習

に行く前に経験しています。

　最後に、この授業の総合的な仕上げとして、⑭模擬保育演習があります。５～６人ずつのグループに分かれ、１人の先生役と子ども役に分かれます。そして、交代して 10 分ずつ保育場面を経験します。模擬保育では、その前の⑬の授業時間に保育指導案を立案し準備します。何歳児か、どの場面か（朝の集まり・給食前など）などを想定し、手遊びやわらべ歌、絵本やペープサートなどの視聴覚教材、製作などの保育的行為を実践します。

手袋シアターは特に赤ちゃんなど乳児に人気があります。歌いながら演じます。一方的に演じるのではなく、子どもたちの反応を見ながら速さを変えたり、繰り返したりなど応答的に行うことが求められます。

風船のペープサートです。割りばしに絵が描かれた保育演習教材です。子ども側にはピンク色の風船が見えています。風船の歌に合わせてくるくるとペープサートを回転させると、桃色の風船が桃に変化する大人気の保育教材です。模擬保育ではありますが、先生側も子ども側もなりきって“遊び”を体験していますね。

【模擬保育演習の学生の声】
・今回の模擬保育では、自分自身楽しみながら先生役を演じることで、様々な気づきがあり、また、友だちの発表の際は参考になるものがたくさんあり、子どもに戻った気持ちで楽しむことができたので良かったです。
・実際にみんなの前でやったとき、その場の雰囲気で臨機応変に対応しなくてはならないことに改めて気づいた。子どもの反応がそれぞれ違うので、それに応じた保育が必要だと感じた。
・自分がやっている時は一生懸命なためなかなか気づけない部分もあったが、グループの友だちに聞くとアドバイスなどもくれたので、より多くのことに気付くことができた。
・グループならそんなに緊張しないかなと思っていましたが、いざ自分の番になると一気に視線が集まるので緊張しました。緊張しないというのは無理がありますが、緊張してもしっかりできるよう何度も繰り返し練習する必要があると感じました。
・模擬保育をやってみて、指導案通りにいかないものはもちろんのこと、時間配分を適切に行って進めることも大事だと思いました。今回の経験はとても参考になったので、実習にいかしたいと思います。

【評価基準（ルーブリック）について】
この演習授業の評価は以下の通りです（第１回目の授業で説明しています）。

【評価基準】
①保育は養護と教育が一体となって行われることについて具体的に理解しているか
②各年齢における保育内容についての理解度
③乳幼児の成長を育むための保育的行為の習熟度
【評価方法】
①出席が 50%（1/3 を超えて欠席した場合単位取得不可）
②保育演習への参加と内容で 15%
③模擬保育と保育指導案の内容を総合して 35%

つまり、保育の理論の理解については保育指導案で評価し、保育的行為については模擬保育での評価となります。また、模擬保育については先生役だけでなく子ども役も評価の対象とし、グループ全体で保育＝遊びが豊かに展開されているかを総合して評価しています。一般的な模擬保育（授業）の評価は先生役の評価になりがちかと思われますが、「3 歳児ならこんな言動をするだろう」などといった子ども役がその年齢の子どもになりきることで模擬保育は成り立ちます。ともに保育をつくっていく姿勢も演習授業の評価の観点として私は大事にしています。それぞれの演習ごとに S・A・B・C 評価をつけ、総合評価に反映させています。

アクティブラーニングの授業の一例として、今回は『保育内容総合演習』を紹介しました。学生の声にもある通り、お互いが学びあえることも演習授業の良さだと思います。保育は簡単ではありません。頭での理解だけでは足りません。理論が保育的行為となって初めて子どもたちに届くという保育実践力の高い保育者を育てていくことを目標にした授業運営を心がけていきたいと思います。

（文責　前田有秀）